

放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究

その2 北九州市の放課後児童クラブにおけるおやつ の 現 状 と 課 題

A Study of Living Environment in Clubs
for After School Activities for Children
—The Current State and Problems of a Snack Food of Clubs
for After School Activities for Children in Kitakyushu City—

秋 武 由 子 *¹ 岡 俊 江 *² 小 笹 (香川) 治 美 *³

Yoshiko AKITAKE

Toshie OKA

Harumi OZASA (KAGAWA)

*¹ 福岡教育大学 (非常勤)

*² 九州女子大学家政学部

*³ 北九州産業学術推進機構

鈴 木 佐 代 *⁴ 豊 増 美 喜 *⁵

Sayo SUZUKI

Miki TOYOMASU

*⁴ 福岡教育大学家政教育講座 *⁵ 大分大学大学院工学研究科

(平成22年9月30日受理)

1 緒言

放課後児童クラブ (以下クラブと称す) は, 昼間保護者がいない家庭 (留守家庭) の児童が学校の放課後や夏休み等の長期休暇中に家庭に代わって過ごす場所である。クラブでは, 一般に, おやつが提供されている。

学童期のおやつ的重要性については, 山口らが「単に栄養素などの補給のみならず, 精神・心理面に果たす役割も大きい」と述べ¹⁾, また, 上田ら²⁾と山口ら³⁾は, 幼児のおやつ (間食) の役割として, ①精神的役割 (食べることの楽しさや, それを他者と共有することの喜び, 気分転換や休息の時間にするなど), ②栄養的役割 (1日3回の食事では補いきれない栄養素をおやつから摂取する一方で, 栄養素の過剰摂取についても考慮するなど), ③教育的役割 (マナーなどの躰や, 正しい手洗い方法, 衛生的な食品の取り扱いも身につやすく, 子どもと一緒におやつを手作りすることなどで食自体に関心を高めるなど) の3つを挙げている。

さらに, クラブの食に関しては, 厚生労働省の報告書 (平成16年2月) で, 子どもに“食べる力”を育むための具体的支援方策例として「児童館・放課後児童クラブからの発信」が挙げられている⁴⁾。

クラブで提供されるおやつに関しても, これら3つの役割があると考えられる。特に, おやつ の 補 食 としての役割に関しては, 昨今, 高学年まで通所可能な「全児童化」が進行しつつあるので, 成長期の児童を考慮したおやつ の 選 定 が 重 要 である。さらに, 手作りおやつは, その内容に多様性を持たせるとともに, 児童も手作りに参加する場合は, その体験が児童に食に対する興味・関心を喚起するきっかけ作りとしての効果も期待でき, おやつ の 教 育 的 役 割 (食育) の 観 点 から も 重 要 である。

クラブのおやつは, 誰によって, 何を基準に選定され, これら3つの役割は配慮されているか, 指導員と保護者はおやつに対してどのような役割を希望しているか, 手作りおやつを可能とする台所設備は整っているか等を検証することは, クラ

ブの生活環境整備の推進に寄与できると考える。

以上の問題意識に立って、クラブのおやつに関する先行研究をみると、食品や栄養素量を考慮して児童自身でおやつを選択する力をつけるプログラム開発を行った吉岡らの報告⁵⁾、おやつ熱量、脂肪分、Na量を調べ、おやつ内容の特徴など現状把握を行った寺嶋の報告⁶⁾などがあるが、おやつに対する指導員と保護者の考え方や、手作りおやつとクラブの台所の設置状況に着目した報告はない。

そこで、本研究は、クラブで提供されるおやつに着目し、その与え方の実態と、クラブ指導員と保護者の考え方を明らかにする。さらに、生活環境整備の視点から手作りおやつの実施状況と台所空間の実態について明らかにして、“食べる力”を育むための情報発信の基礎資料となることを目的とする。このために、以下の4つの研究課題を設定し、順次明らかにする。

- (1) クラブで提供されるおやつの内容を明らかにする。
- (2) おやつを選択に関して、誰がどのような基準で行っているのかを明らかにする。
- (3) おやつに対するクラブ指導員と保護者の意識を明らかにする。
- (4) 手作りおやつの実施状況と台所空間の実態を明らかにする。

2 方法

(1) 調査概要

4つの研究課題を明らかにするために、北九州市内のクラブを対象として、クラブを運営する北九州市役所の担当部署を対象にヒアリング調査と、クラブの指導員および児童の保護者を対象とするアンケート調査を行った。

(a) 北九州市役所担当部署の調査は、2009(平成21)年7月～2010(平成22)年8月に、同市子ども家庭局子ども家庭部子育て支援課を対象にクラブの概要および現状のヒアリングと、建築都市局建築部を対象にクラブの図面閲覧を実施した。

指導員調査は、各クラブの主任指導員1名を対象に、2009年8月に実施した。調査内容は、クラブ全体に関する事項(規模、児童の数、開所時間、職員体制、保護者や関係機関・地域との連携、働く環境(施設環境)、おやつ、児童の過ごし方、安全対策、クラブの全児童化)と、回答者の個人属性や意識に関する事項(保護者や関係機関・地域との連携、子育てや働き方の考え方、その他、回答者の属性)である。各クラブにアンケート用

紙と返信用封筒を送付し、個別に郵送によって回収した。

配布数は112票、回収数は55票、回収率は49.1%である。

保護者調査は、指導員調査の回答をもとに、児童の人数から大規模(71人以上)・中規模(41～70人)・小規模(40人以下)に分類し、各規模から地域や運営主体・広さが偏らないように各5クラブ計15クラブを選び、保護者を対象に2009年11月に実施した。調査内容はクラブ・地域との連携、クラブの生活環境・安全対策、おやつ、子育てや働き方の考え、回答者の属性と定住意識についてである。宅配便によって、クラブを介して保護者にアンケート用紙と返信用封筒を配布し、個別に回答・厳封の後、クラブでまとめて回収した。配布数は535票で、回収数は236票、回収率は44.1%である。

(2) 調査対象の概要

- (a) クラブと指導員の概要は、前報に示す⁷⁾。
- (b) 保護者の属性

保護者アンケート回答者は、母親が236人中218人(92.4%)、父親が16人(6.8%)、祖母が1人(0.4%)で、母親が圧倒的に多かった。年齢は母親、父親ともに30歳代、40歳代が多く全体の約9割を占める。祖父はなく、その他の内容は叔母であった。

子どもを含めた同居している人数は、4人が最も多く(103例、43.6%)、同居者構成としては子どもと両親が多かった(159例、67.4%)。「子どもと母親または父親とその親」(21例、8.9%)「子どもと母親または父親」(28例、11.9%)の内容としては母子家庭が約8割と大半を占める。

3 結果と考察

(1) クラブのおやつ現状

北九州市子ども家庭局へのヒアリング調査によると、北九州市はクラブで出すおやつについての規定等を設けておらず、指導員を対象としたおやつに関する研修等も行っていない。したがって、おやつの与え方は、それぞれのクラブに任せられている。いかえると、おやつの選定は、各クラブが独自に行っている。

指導員調査によると、おやつは、すべてのクラブで児童に出されている。

おやつの予算は、1日分の児童1人あたり最低40円～最高200円、平均93.6円であった。「100～109円」が41.8%と最も多く、次に「80～89円」

の18.2%である(表1)。

クラブで実際によく出されているおやつは、3点自由記述回答によると、25種類であった。「スナック菓子」が52.7% (29件)で最も多く、「アイスクリーム・氷菓子」が27.3% (15件)、「ヨーグルト」20.0% (11件)、「チョコレート・チョコ菓子」「ゼリー」「果物」「せんべい・おかき類」「クッキー・ビスケット」の5種類が16.4% (9件)と続いている(表2)。

表1 クラブにおける1日分の児童1人あたりのおやつ予算

予算	クラブ数 N=55	%
40~49円	1	1.8
50~59円	4	7.3
60~69円	3	5.5
70~79円	1	1.8
80~89円	10	18.2
90~99円	2	3.6
100~109円	23	41.8
110~119円	1	1.8
150~159円	2	3.6
200~209円	2	3.6
その他	2	3.6
無回答	4	7.3

表2 クラブでよく出されているおやつ
(自由記述で3点回答)

おやつ名	クラブ数 N=55	%
スナック菓子	29	52.7
アイスクリーム・氷菓子	15	27.3
ヨーグルト	11	20.0
チョコレート・チョコ菓子	9	16.4
ゼリー	9	16.4
果物	9	16.4
せんべい・おかき類	9	16.4
クッキー・ビスケット	9	16.4
乳酸飲料	8	14.5
パン	8	14.5
牛乳	4	7.3
ドーナツ	3	5.5
おにぎり	3	5.5
肉まん	3	5.5
飴	3	5.5
プリン	3	5.5
ジュース	2	3.6
小魚・するめ	2	3.6
ホットケーキ	2	3.6
ガム	2	3.6
うどん	1	1.8
そうめん	1	1.8
たこ焼き	1	1.8
カップ麺	1	1.8
グミ	1	1.8
その他	10	18.2
無回答	7	12.7

(2) おやつを選択時に重視すること

おやつを準備する際に重視している点は、指導員は「価格」(61.8%)が最も多く、「適量である」(58.2%)、「衛生管理しやすい」(58.2%)、「小分けで配りやすい」(50.9%)が50%を超えていた。一方で20%を下回っているのは6項目で、そのうち「水分を多く含むものや飲み物をつける」(18.2%)、「塩分控えめ」(14.5%)、「甘さ控えめ」(12.7%)、「消化に良いもの」(10.9%)、「カロリー(エネルギー含有量)」(5.5%)の5項目は、およつ糖質、脂質、食塩、水分等の摂取に関する項目や、およつを1日3回の食事の補食としてとらえた項目である。

指導員はおよつを選択する際において、価格や量、衛生管理、効率に関する項目を重視しており、これらに比較して、糖質、脂質、食塩、水分等の摂取に関する項目や、食事の補食としてとらえる項目は重視されていない。

保護者が重視してほしい点は、「適量である」(80.0%)、「衛生管理されているもの」(70.6%)、「食品添加物が少ない」(52.3%)の順となっている。一方で20%前後は9項目で、これに10%未満を合わせると10項目となり、指導員の意識と比較して、それぞれの項目への関心の有無の差が大きく表れている(表3)。

指導員と保護者の両者の差に着目すると、20ポイント以上が3項目あり、指導員の方が高かったのは「価格」(44.8ポイント)、「児童の好み」(26.5ポイント)で、逆に保護者の方が高かったのは「適量である」(21.8ポイント)であった。指導員が保護者よりも重視している理由として、「価格」についてはクラブの予算内でおよつを購入していること、「児童の好み」は指導員がクラブでおよつを食べる時間を児童と共有する中で、児童の好みの傾向を知り、およつの準備に影響していることが考えられる。一方、保護者が「適量である」を重視しているのは、児童の夕食の摂取量におよつの影響があると考えていると推察される。

(3) およつの役割

指導員と保護者のおよつの役割について重要だと思ふことの1~3位は同項同順で、「友だちと楽しい時間を共有する」(指導員72.7%、保護者86.9%)、「気分転換や休息の時間」(65.5%、72.0%)、「準備、片付けなど友だちとの協力を学ぶ」(41.8%、64.8%)であった。いずれも保護者の方が高い数値を示している(表4)。

一方、「1日3回の食事では取りきれない栄養

表 3 保護者がクラブのおやつを選択する際重視してほしい基準 複数回答 5 つ選択

おやつの重視点	指導員N=55		保護者N=235		両者の差(主任-保護者)
	件数	%	件数	%	%
適量である	32	58.2	188	80.0	-21.8
価格	34	61.8	40	17.0	44.8
注文や購入がしやすい	19	34.5	49	20.9	13.6
保存がしやすい	20	36.4	45	19.1	17.3
衛生管理しやすい(されている)	32	58.2	166	70.6	-12.4
小分けで配りやすい	28	50.9	113	48.1	2.8
カロリー(エネルギー含有量)	3	5.5	49	20.9	-15.4
消化に良いもの	6	10.9	57	24.3	-13.4
甘さ控えめ	7	12.7	49	20.9	-8.2
塩分控えめ	8	14.5	56	23.8	-9.3
食品添加物が少ない	27	49.1	123	52.3	-3.2
旬の果物や野菜等	17	30.9	99	42.1	-11.2
水分を多く含むものや飲み物をつける	10	18.2	48	20.4	-2.2
児童の好み	27	49.1	53	22.6	26.5
保護者の要望	1	1.8	5	2.1	-0.3

表 4 指導員と保護者がクラブのおやつの役割として重要視していること 複数回答 3 つ選択

おやつの重視点	指導員N=55		保護者N=236		両者の差(主任-保護者)
	件数	%	件数	%	%
食事では取りきれない栄養を補うため	16	29.1	62	26.3	2.8
気分転換や休息の時間	36	65.5	170	72.0	-6.5
生活リズムができる	18	32.7	50	21.2	11.5
食事マナーを身につける	15	27.3	28	11.9	15.4
食に関する興味・関心を持つ	11	20.0	26	11.0	9.0
友だちとの楽しい時間を共有	40	72.7	205	86.9	-14.2
準備、片付けなど友だちとの協力を学ぶ	23	41.8	153	64.8	-23.0

を補うため」は指導員が 5 位、保護者が 4 位で、ともに 30% を下回っており関心は高くない。

さらに、おやつの教育的役割(食育)の観点からも必要であると考えられる「食に関する興味・関心を持つ」は、指導員、保護者ともに最も関心が低かった。

(4) 台所の環境

台所は、全クラブで設置されている。

台所の設置場所は、「専用の空間がある」が 72.7%、「児童が活動する部屋にある」が 20.0% である(前報 図 2)⁸⁾。

調理の際の熱源は、「ガス」が 72.7%、「電気」が 16.4%、「電気とガス」が 7.3% の順であった。このように熱源はガスが多い(表 5)。

(5) 指導員による手作りおやつ

クラブで、指導員がおやつを手作りするのは、「年数回」(43.6%) が最も多く、月 1~2 回(14.5%) と、週 1 回(12.7%) は 10% 台であった。一方で、「ない」が 23.6% で、1/4 弱を占めた(表 6)。

表 5 調理の際の台所の熱源

熱源	件数N=55	%
電気	9	16.4
ガス	40	72.7
加熱することはない	2	3.6
電気とガス	4	7.3

表 6 クラブで指導員がおやつを手作りする回数

回数	件数N=55	%
週 3 回以上	3	5.5
週 1 回	7	12.7
月 1~2 回	8	14.5
年数回	24	43.6
ない	13	23.6

(6) 児童のおやつ手作り体験

クラブで、児童とおやつの手作りが「ある」のは 69.1% (38 件) で、多くのクラブが児童におやつの手作りの機会を設けている(表 7)。おやつの手作り実施クラブ 38 件の 1 年間の実施回数は、「1~5 回」が 65.8% (25 件) が最も多く、「6~10 回」が 10.5% (4 件)、「11 回以上」が 2.6%

(1件)あった(表8)。

指導員の手作りおやつ実施の回数と、指導員が児童とおやつを手作りする機会の関連をみると、指導員がおやつを月に1~2回以上手作りするクラブは85%以上、年数回手作りするクラブは79.2%が、児童とおやつを作ったことがある。一方で指導員がおやつを手作りすることはないクラブは、76.9%が児童とおやつを作ったことがない(表9)。

次に、クラブの規模と手作りおやつとの関連をみる。「指導員がおやつを手作りする」、「児童とおやつを手作りする」のどちらの項目においても大規模クラブ(71人以上)が最も多く、ともに86.7%であった。大規模クラブと中規模クラブ(41~70人)・小規模クラブ(40人以下)の差は「指導員がおやつを作る」が約10ポイント、「児童とおやつを作る」約25ポイントの差となり、大規模クラブで手作りおやつが多く取り入れられている(表10)。

表7 クラブで児童がおやつを手作り機会の有無

手作り機会	件数N=55	%
ある	38	69.1
ない	17	30.9

表8 1年間でクラブの児童がおやつを手作りする回数

回数	件数N=38	%
1~5回	25	65.8
6~10回	4	10.5
11回以上	1	2.6
その他	3	7.9
無回答	5	13.2

(7) 台所形態と手作りおやつの実施

台所の形態別に手作りおやつ実施の有無をみると、「指導員がおやつを手作りする」は、「専用空間がある」が82.5%、「児童の活動する部屋にある」が72.7%で、専用空間がある方が9.8ポイント高かった。

「児童と手作りおやつを作る」は、「専用の空間がある」が67.5%、「児童の活動する部屋にある」が81.8%で、「指導員がおやつを手作りする」とは逆に児童の活動する部屋にある方が14.3ポイント高かった。

指導員のみでおやつを手作りする場合は、専用空間を有する方が作業しやすく手作りおやつを取り入れやすいが、児童と手作りおやつを作る場合は、作業人数が多数となるため、児童が活動する部屋に台所がある方が作業しやすいと推察される(表11)。

保護者が家庭で児童とおやつを手作りする機会があるのは、「年数回」(50.0%)が最も多く、「月に1~2回」が20.3%で、「ない」は27.5%であった。家庭でのおやつの手作りは、児童の約70%が回数の違いはあれ経験している(表12)。

クラブで児童におやつの手作り体験してほしいかについては、保護者は92.8%の高い割合で体験することを望んでいる(表13)。

児童の家庭でのおやつの手作り回数と、保護者のクラブでのおやつの手作り体験希望の有無をみると、無回答を除く全ての項目で90%以上の保護者が体験を望んでいる(表14)。家庭での体験回数が多き児童の保護者ほどその傾向が強い。

注目すべきは、家庭でおやつの手作り経験のな

表9 指導員の手作りおやつ の回数と児童とおやつを手作りする機会の有無

指導員の手作りおやつ の回数	児童とおやつの手作り機会			
	ある		ない	
	件数	%	件数	%
週3回以上(N=3)	3	100.0	0	0.0
週1回(N=7)	6	85.7	1	14.3
月1~2(N=8)	7	87.5	1	12.5
年数回(N=24)	19	79.2	5	20.8
ない(N=13)	3	23.1	10	76.9

表10 クラブの規模と手作りおやつ実施の有無

クラブの規模(定員)	指導員				児童			
	作る		作らない		作る		作らない	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
大(71人以上)(N=15)	13	86.7	2	13.3	13	86.7	2	13.3
中(41~70人)(N=17)	13	76.5	4	23.5	10	58.8	7	41.2
小(40人以下)(N=21)	16	76.2	5	23.8	13	61.9	8	38.1
無回答(N=2)	1	50.0	1	50.0	2	100.0	0	0.0

表11 クラブの台所の形態と手作りおやつ実施の有無

台所の形態	指導員				児童			
	作る		作らない		作る		作らない	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
専用空間がある(N=40)	33	82.5	7	17.5	27	67.5	13	32.5
児童の活動する部屋にある(N=11)	8	72.7	3	27.3	9	81.8	2	18.2
その他(N=4)	1	25.0	3	75.0	2	50.0	2	50.0

表12 家庭で児童がおやつを手作りする回数

回数	件数 N=236	%
週1回以上	3	1.3
月1~2回	48	20.3
年数回	118	50.0
ない	65	27.5
無回答	2	0.8

表13 クラブで児童におやつの手作り体験をしてほしいか

希望内容	件数 N=236	%
体験してほしい	219	92.8
体験する必要はない	16	6.8
無回答	1	0.4

表14 児童の家庭でのおやつの手作り回数とクラブでおやつを手作り体験してほしいかの希望

家庭での児童との 手作りおやつ回数	「クラブ」でおやつ作りを					
	体験してほしい		体験する必要はない		無回答	
	件数	%	件数	%	件数	%
週1回以上(N=3)	3	100.0	0	0.0	0	0.0
月1~2回(N=48)	46	95.8	2	4.2	0	0.0
年数回(N=118)	110	93.2	8	6.8	0	0.0
ない(N=65)	59	90.8	6	9.2	0	0.0
無回答(N=2)	1	50.0	0	0.0	1	50.0

い30%弱(65人)の児童の保護者のうち90%以上が体験させたいと望んでいる点で、保護者のクラブへの期待が窺える。

4 まとめ

北九州市内の放課後児童クラブを対象に、クラブで提供されるおやつとの与え方の実態と、指導員と保護者の意識、手作りおやつの実施状況と台所空間の実態を明らかにするためにヒアリング調査、アンケート調査、現地調査を行って、以下の知見を得た。

(1) おやつの内容に関しては、運営主体である北九州市には基準がなく、各クラブに任されており、選定は各クラブが独自に行っている。おやつ1日分の予算は、児童1人あたり、最低40円~最高200円、平均93.6円で、「100~109円」が41.8%と最も多い。

よく提供されるおやつは25種類あり、「スナック菓子」(52.7%)、「アイスクリーム・氷菓子」(27.3%)、「ヨーグルト」(20.0%)が上位を占めた。

(2) おやつを選択時に重視することは、指導員は「価格」(61.8%)、「適量である」(58.2%)、「衛生管理しやすい」(58.2%)、「小分けで配りやすい」(50.9%)、保護者は「適量である」(80.0%)、

「衛生管理されているもの」(70.6%)、「食品添加物が少ない」(52.3%)の順となった。「適量である」については、おやつを準備する指導員と、一般におやつ後に夕食を準備する保護者との立場の違いによると推察される。指導員が保護者の要望の大きさについて認識を深めるとともに、保護者へ指導員の重視する理由を説明し相互に理解を深めることが望まれる。

(3) おやつ役割として、指導員と保護者は両者ともに、「楽しい時間の共有」や「気分転換や休息」といった精神的役割や、「友だちとの協同を学ぶ」など人との繋がりを持った教育的役割を重視している。一方、栄養的役割への関心は低かった。

(4) 台所は、全クラブで設置されており、設置場所は、「専用の空間がある」が72.7%、「児童が活動する部屋にある」は20.0%である。

70%のクラブで児童におやつの手作り体験の機会を設けており、保護者側の手作り体験の希望も90%以上ある。

台所の設置場所と手作りおやつ作業者に着目すると、専用空間の台所は指導員のみの場合に、児童の活動する部屋にある台所は指導員と児童の多数の場合に、より多く使われており、作業人数と設置場所の作業しやすさの関係が表れていると

考えられる。

本研究は北九州市男女共同参画センター“ムーブ”の平成21年度ジェンダー問題調査・研究支援事業の助成を受けた。

引用文献・注

- 1) 山口規容子・水野清子「新育児にかかわる人のための小児栄養学」診断と治療社, p.4, p.135, p.148 (2006年1月)
- 2) 上田玲子・赤石元子・酒井治子・土井正子・永井由利子・西田美佐・林薫・堀端薫「子どもの食生活—保育と小児栄養—」ななみ書房, p.109 (2006年4月)
- 3) 上掲1)
- 4) 厚生労働省「食を通じた子どもの健全育成(—いわゆる「食育」の視点から—)のあり方に関する検討会」報告書(2004年2月)
- 5) 吉岡有紀子・高増雅子・足立巳幸「学童保育所における「わくわく食探検」プログラムの開発と評価」小児保健研究, 63巻,第5号, pp.524-534 (2004年9月)
- 6) 寺嶋昌代「学童保育室のおやつ調査」東海学院大学紀要,第3巻, pp.67-76 (2009年)
- 7) 藤原陽子・鈴木佐代・秋武由子・岡俊江・小笹(香川)治美・豊増美喜「放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究 その1 北九州市の放課後児童クラブにおける施設の現状と問題点」福岡教育大学紀要, 第60号, 第5分冊, 印刷中(2011年2月)
- 8) 上掲7) 図2

